ローリング☆ガールズ&パンツァー

ターボー001

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

お分かりかと思いますがこの作品はローリング☆ガールズとガールズ＆パンツァーのクロスオーバー作品であり、両作品の設定等には一部改変が行われています。大丈夫な方だけお読みください。ローリング☆ガールズとしては２話終了後、ガールズ＆パンツァーとしてはプラウダ戦前になります。望未達が最初に東京ではなく、大洗へ向かっていたら・・・という設定です。望達が大洗学園艦で過ごした数日間のお話

ただ両作品が好きな私の自己満足作品です。

目　次

1．はじまりの歌 ―― 1
2．原っぱ ―― 3
3．ＳＴＯＮＥＳ ―― 7
4．深夜 ―― 15
5．ランニングホームラン ―― 22

1．はじまりの歌

地方自治をめぐる「東京大決戦」の終結から10年がたち、都道府県がすべて独立国家となった列島。しかし学園艦には何も関係のない話。何故なら学園艦だから。

ご当地色をテーマパークのように肥大化させた各地域では「モサ」と呼ばれる能力者が自警団を率いて統治、あるいはその一翼を担っていた。しかし学園艦には何も関係のない話。何故なら学園艦だから。

そんな中、あちこちで巻き起こるご当地トラブル！　それをうまく静めるもの、平和請負人（世直し）として所沢のヒーロー、マッチャグリーンは他国（他県）から高い評価を受けており、彼（彼女）の元には平和請負人の依頼の手紙が何通も届いていた。しかし学園艦には何にも関係のな・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・くもない話。ここ大洗学園艦にもその力を借りようとして手紙を書く少女の姿が一人あった。

拝啓　マッチャグリーン様

突然お手紙を差し上げる失礼をお許し下さい。私は大洗学園艦にある県立大洗女子学園の生徒会長をしております角谷　杏　と申します。この度あなた様の平和請け負い人のご活躍を聞き、是非我が校でもその腕を奮って頂きたく思っております。肝心の内容なのですがそちらは直接お会いした時にご相談出来ればと思っております。手前どもの勝手なお願いで恐縮ですが、もしお会い頂けるなら別紙にあります日程で大洗に帰港予定ですので是非とも大洗へお越しいただけないでしょうか。問題が解決した暁にはあなたが探していると噂のハート型の石を差し上げます。どうぞご一考の程よろしくお願い致します。　敬具

県立大洗女子学園　生徒会長　角谷　杏

「こんなもんかな？　まっ、来てくれるわけないけどね、やれることはやっとかないと。廃艦を免れるなら藁にでも何にでもすがってやるさ!!　かぁ～しま～、この手紙出しといて～。」

・・・・・・
・・・・・
・・・・
・・・
・

「おっ？　望未、あの案内標識に『大洗』って書いてあるからもうすぐなんじゃないか？」
「どれ？　あっ本当だ!!　結季奈ちゃん、ちーちゃん、もうすぐみたいだよ!!」
「迷わないで着くなんて夢のようです。」
「～♪」
「あれ？　逢衣ちゃん、その歌って・・・」
「ノンスケ!!　なんか看板が出てる!!」
「「「戦車道の試合につき　通行止　ご協力ください!?」」」
「・・・戦車道ってなに？」

ひょんなことから平和請負人代行を務めることとなった４人の単車乙女と大洗の戦車乙女の数日の夏がここからはじまる。

2．原っぱ

『戦車道の試合につき　通行止　ご協力ください』

そう書かれた看板を凝視する４人の少女、森友望未、小坂結季奈、響逢衣、御園千綾。だがどれだけ見つめようともご丁寧にデフォルメされた戦車が砲弾を撃ってるイラストつきの看板の文字が変わらずにそこにあった。あまりの珍しさに千綾が自分のデジタルカメラで撮りだす始末である。

看板の文字と先の道を見る限りでは工事等で通行止めになっているわけではないことが伺える。道はちゃんと舗装されている。ならば無視して進んでも大して問題にならないのでは？　しかし『戦車道』この聞き慣れない言葉が引っ掛かってしまう。

「どうしよう。この依頼者の、つ、つのたにさん？　が大洗で待っているかもしれないのに。」

「別のルートを探しましょうか？」

不安を漏らす望未に新たな道を探す提案をするが方向音痴の結季奈。ちなみに千綾はまだ写真を撮っており、逢衣に至っては望未のサイドカーでうつらうつらと寝かけている。

「・・・不安だ。」

今度は心の声を漏らした。

プップーー

溜め息をつこうとした瞬間に背後から突然の音。寝かけていた逢衣も起き、ビクつきながら４人が振り返ると一台の車の窓から老婆が顔を出していた。

「よかったー。先に進んでなかったのね。」

車から降りて４人に近づいてくる足取りのしっかりした老婆に思

わず「どうも」と会釈をする４人。

「私、ここら辺が地元なんだけどさっき道ですれ違った時にあなた達を見かけて、もしかしたら今日戦車道の試合があるって知らないんじゃないかって思って引き返してきたの。・・・というかあなた達、そもそも戦車道って知ってる？」

老婆の問いに対して４人は顔を見合せ、全員で首を横に振る動きをシンクロさせた。

「やっぱりね。今は戦車道をやる学校が少なくなったし、特に本土の学校じゃなかなかやらないわよね。あのね、戦車道っていうのはね・・・」

その後老婆から戦車道の何たるかを軽く教わり、なんと大洗までの別ルートを案内してくれることとなった。大洗へ向かう途中で望未達はいくつか老婆に質問を投げた。

まず何故自分たちが本土の学生とわかったのか。高校は大きく分けると学園艦と本土の学校がある。その事は常識であり千綾以外の三人もわかっている。しかし今は夏休みだから本土に帰省してる学園艦の学生もいるはずの中、何故？

「そりゃあ、学園艦はまだ夏休みじゃないからね。本土と学園艦でズレがあるのよ。あなた達夏休みはじまったばっかりでしょ？」

知らなかったとまた顔を合わせる４人。そしてもうひとつの肝心の質問を投げる。どうしてここまで親切にしてくれるのかと。

「あなたのサイドカー見てたら昔、ウラルに乗ってたの思い出しちゃったの。それだけよ。」

その後の話を聞く限りこの人は昔、戦車道をやっていて休日には軍用のバイクなど乗り回すのが趣味だったらしい。そして本日大洗で

やる戦車道の練習試合を見に行く途中で４人に会ったというわけらしい。

「今年から復活した大洗女子学園の戦車道なんだけど準決勝まで行ったの!!そして今日はその準決勝戦前の練習、紅白戦なの!!」

興奮気味に話す老婆に気圧されながらも『大洗女子学園』という単語が出てきたことに嬉しさを覚え、思わず笑顔になるが

「あっ、学園艦が見えたわ。もうすぐで大洗よ。」

「うへっ!?」

「おおー！　でかい!!」

「えええっ!?」

「わぁ～!!」

生で見る学園艦の大きさに四者四様の反応を示す。が学園艦を見た途端に無意識に全員のスピードが上がったのを見て老婆は微笑んでいた。

その後無事に大洗マリンタワーまで着き、老婆にお礼を言っていると今度は望未達が質問をされた。

「そういえばあなた達、どうして大洗へ来たの？」

「えっと、大洗女子学園の生徒会長さんに用があって・・・」

「あらそうだったの!!　じゃあちょうどいいから試合を見ていきなさいよ。そこのモニターに映るから。どうせ試合が終わるまで話しかけられないわよ。」

どうしよう、と望未は他の3人に目配せする。

「じゃあ私、ちょっと寝てるから終わったら起こして。」

さっきからサイドカーで寝かけていた逢衣がいよいよ我慢できなくなったのかモニター前の広場の原っぱに寝転んで目を閉じた。そ

の行動を見て残り二人が逢衣の横に体育座りでモニターを見つめる。
「もーう逢衣ちゃん、失礼だよ‼　ちゃんと起きて見ようよ!!」
「ふふっ、大丈夫よ。嫌でも起きるから。」
「えっ？」

その後、モニターに映る自分と変わらないくらいの歳の少女達が並んで礼をして試合が始まり、最初の砲弾が撃たれたところで逢衣が飛び起きたのは言うまでもない。

3．ＳＴＯＮＥＳ

「凄かったねー、戦車道!!」
「力強さがいいよな。モサっぽくて!!」
「絵になりますよね!!創作意欲を掻き立てられます!!」
「いっぱい写真撮った!!」

大洗女子学園の練習試合が終わってから３０分は経とうとしていたが、初めて見る戦車道に興奮冷めやらぬ４人はまだ試合の内容について盛り上がっていた。

「戦車道にハマってくれるのは嬉しいんだけどあなた達いいの？　大洗女子学園の人たちに用があるんじゃなかったの？」

「「「あっ。」」」

談笑していた４人の顔が固まる。

「もしかしたらあそこのまいわい市場で買い物している学生がいるかもしれないから行ってみなさい。」

「す、すみません!!　ありがとうございました!!」

大洗まで案内してくれたうえ、助け船を出してくれた老婆に感謝しながら別れの手を振り、急いで市場へ駆けていく望未たちだった。

・・・・・・
・・・・・
・・・・
・・

「この新作のアイスも美味しいですね。」
「も～う、華食べ過ぎ!!」
「うるさいぞ沙織・・・眠い。」
「練習試合とはいえやはり勝つと嬉しいですね。これも西住殿の指揮のおかげです!!」
「ありがとう、優花里さん。」

練習試合が終わり市場でショッピングを楽しむ大洗女子学園戦車道履修者のあんこうチーム。久々の陸地を楽しんでいると

「あ、あのっ!!」

突然後ろから声を掛けられる。振り向くと自分たちと歳が変わらないであろう制服姿ではない少女４人が立っており、バイク用のゴーグルを首に下げている子が紙を手に持って一歩前に出てくる。

「な、なんだろう。あっ!!もしかして私たちのファンかな？　やだもーどうしよう!!」
「揺らすな沙織、それはないから安心しろ。」

はしゃぐ沙織にジト目で制止する麻子だが役目は果たせていない。

「何か御用ですか？」

先程まで食べていたコーンアイスをどこかに消した華が尋ねる。

「大洗女子学園の方ですよね？」
「はい、そうですが。」

「そちらの学園のつ、角谷(つのたに)さん？　って方を知っていますか？」
「つのたに？」

聞きなれない名前に「はて？」と首をかしげる華。後ろにいた４人も互いに目をやり確認し合うが誰もはっきりとしない顔なのがわかる。

「ちょっとそちらの紙を見せてもらっていいですか？」
「あ、はい。どうぞ。」

此処、大洗まで来るきっかけとなった依頼書を渡す少女。少し距離を取っていた後ろの４人も興味がわいたようで受け取って熟読する華に近づいて手紙を覗き込む。

「ああ!!角谷(かどたに)会長の事ですね。」
「えっ？　角谷(かどたに)？」
「望未、だっせー!!名前間違えてやんの。」
「あ、逢衣ちゃんだって特に何もツッコまなかったじゃん!!」
「ま、まあまあ望未さん落ち着いて。」
「かどたにって読むんだぁ。」

軽く言い合いを始める者、それを止める者、マイペースな者。各少女たちの反応を呆然と見ていたあんこうチーム面々の視線に気づいたのか、咳払いをして各自横一列に並んで姿勢を正す。
「すみません。私達、所沢からその角谷さんの依頼で来たんです。私、森友望未(もりともものぞみ)って言います。んでこっちが・・・」
「響逢衣(ひびきあい)!!」
「小坂結季奈(こさかゆきな)です。」
「御園千綾(みそのちあや)。」

「これはご丁寧に。私、大洗女子学園２年の五十鈴華(いすずはな)と申します。」

「同じく大洗女子学園２年の秋山優花里（あきやまゆかり）と申します!!」
「武部沙織（たけべさおり）だよ、よろしくね。」
「・・・冷泉麻子（れいせんまこ）。」
「西住（にしずみ）みほです。よろしくお願いしま・・・」

全員の自己紹介が終わるかに思えた時、

「あーー!!さっき戦車から顔出してた人じゃん!!」

逢衣がみほの自己紹介を遮りみほの顔を指差す。失礼な行為と思い、望未が「ごめんなさい」と言おうとみほの方を向くが

「あっ!!本当だ！他の戦車をバンバン撃破してた戦車の人だ!!」
「あの奇襲は良かったですよね。」
「その時のモニターの写真撮ってあるよ。」
「ちー坊ナイス!!どれどれ？」
「「おお～～!!」」

またもや４人の世界に入ってしまう。みほが「あの～」と控えめに声を掛けるが写真に夢中で気がついていない。しかし対するあんこうチームも

「やだ!!私達褒められてるよ!!」
「褒められてるのは西住さんだ。おまえは褒められていない。」
「さすがです!!西住殿!!」
「バンバン撃破・・・何か素敵な響きですね。」
「あは、あはははは。」

同じ世界に入っていたので乾いた笑いをするほかないみほだった。

・・・・・・

・・・・・
・・・・
・・・
・

「なるほど。角谷会長のところに行きたいわけですね。」
「会長ならもう学園艦に戻ったと思うよ。多分学校にいると思うからよかったら案内しようか？」
「でも私達は移動手段が戦車だぞ。」
「あっ、それは大丈夫です。私達全員バイクなんで。」
「バイク!!　是非見せていただいてもよろしいでしょうか？」
「いいぜ。その代りアンタが乗ってる戦車も見せてくれよ。」
「逢衣ちゃん自分のバイクじゃないでしょ!!!!」

気を取り直して本題に入り、こんなやり取りをしつつ学園艦に乗り込むことになった望未たち。戦車に先導されながら大洗女子学園へ向かう。道中、初めての学園艦に視線を忙しくキョロキョロとさせて「船の上なのに住宅やコンビニがある。」といった感想を漏らしていた。そして目的地の大洗女子学園に着き、戦車倉庫の脇にバイクを止めさせてもらって生徒会室まで９人で歩く。

「すみませーん、会長。お客様をお連れしました。」
全員を代表して華が生徒会室のドアをノックする。ドア越しに「お客様？まあいいよー。」という楽観的な声が聞こえたのでドアを開けて、「どうぞ。」と望未たちを先に入室させる。部屋に入ると高い背もたれ椅子のある作業用の机ではなく、応接用の机の方の椅子に腰かける生徒会の３人が見えたので４人はその近くまで歩み寄る。

「はじめまして。私達、マッチャグリーンの代理で来ました平和請負

人です。生徒会長の角谷さんは・・・？」

「私だけど・・・・マッチャグリーン？」

背丈の小さいツインテールの少女、杏が干し芋を手を使わず口だけで食べながら器用に喋り、訝しむ表情を浮かべる。

「こ、この依頼書を送られたと思うんですけど・・・」

その表情に望未が焦りながら杏に手紙を渡す。

「・・・・あーーー!!!!マッチャグリーンさんね!!はいはい!!」

いつもの明るい表情になりコクコクと頷く杏を見てほっとする望未。しかし

（何ですか会長？　マッチャグリーンって？）

（いや、もしも戦車道で1回戦とかで負けた時の保険として所沢の平和請負人ってのをやってる人に手紙出しといたんだよ。廃校の件、相談に乗ってもらおうと思って。もしくはあの役人ぶっ飛ばしてくれないかなって（笑）　まさか本当に来てくれるとは思わなかったけど・・・でも後ろに西住ちゃん達いるから理由話せないね。　）

（それに代理人って言ってましたよ。）

（そうなんだよね～。どうみても年齢が私たちと同じくらいだし、これは無駄足させちゃったかな？　ちょっと聞いてみよ。）

「ちなみにマッチャグリーンさんは？」

「今ちょっと怪我で入院してまして・・・それで私たちが代理で。」
「なるほどなるほど。」

（これは詰みだね。せっかく来てもらって悪いけどこの石あげて帰ってもらおうか。）

（役人に呼び出された帰りに突然降ってきたあのハート型の石ですか？）

（そうそう。）

長いヒソヒソ話をする生徒会3人に不安を覚える望未たち。声を掛けようかと望未が手を挙げようとした時

「あーーーー!!!」

本日2度目の声での遮りをする逢衣。深くため息をつきながら望未は問う。

「逢衣ちゃん今度は何？」

「船が動いてる!!」

生徒会室のすべてガラス張りの窓を指してアワアワとする逢衣。

「「えっ？」」

思わず首を窓に向ける3人。そこに映るのは船が動いたことで発生する人工の白い波がゆっくりと海に溶けていき、そして港が小さくなっていく風景。まぎれもなく船が動いている証拠だった。

「あ、あの、学園艦って何日か停泊するって聞いたことがあるんですけど・・・」

結季奈が確認の為、恐る恐る杏に尋ねる。

「んー？　ああ、今回は練習試合の為に無理言って大洗に一時的に停めてもらっただけだからね。すぐ出発するんだよ。ちなみにしばらくは大洗に戻らないし、他の港にも着かないよ。」

「「「「えっ・・・えーーーーーーーーー!!!!!!!!」」」」

杏の返答に４人の叫びが生徒会室全体に響いた。

4．深夜

「大丈夫、大丈夫。ちゃんと定期連絡船はあるからそれで帰れるよ。私が呼んだせいだからね、手続きはこっちでやっとくから安心して～。」

杏の言葉に胸をなでおろすバイク乗り４人。しかし結季奈がある問題に気づく。

「それはそうと・・・泊まる場所、どうしましょうか。辺りは暗くなって来てますし早く決めないと。」

生徒会室から見える夕日はもうすぐ置いてけぼりにできそうなくらい小さくなってきていた。結季奈の言葉に「あー」と考え込む望未に杏は追撃をかまそうとする。

「ちなみにこの辺ホテルとかは無いからね。」

「あっ、それは大丈夫です。私達、テントを持ってきてるんで。どこか張れる場所があれば・・・」

「じゃあ学校に泊まりなよ!!　グランド使っていいからさ！」

「えええええっ!!　いやでも、悪いですし。」

「いいから、いいから。」

「あ、あの。こういうのって普通、先生とかに許可取らないといけないんじゃ・・・」

「ん？　ああ、もしかしてみんな本土の学生なの？」

「はい。今夏休みで。」

「そっかー、じゃあ知らないかもねー。学園艦はね、生徒の自主性を重んじるから決め事の権限が結構生徒に任されてるんだよね。だから生徒会長の私が許可を出せばオッケー！　ニシシッ、ブイ!!　にしても夏休みかー、いいなぁ。」

「・・・学園艦って凄っ。じ、じゃあお言葉に甘えて・・・・」

　突然の提案に一度は断ろうとしたものの、杏の押しと笑顔のＶサインで急遽大洗女子学園に泊まる事が決定。しかしまだ何か大事なことを忘れているような気がする望未。その表情に気づいたのか結季奈が耳打ちをする。

（望未さん、月明かりの石の件!!）
「あっ、そうだった。会長さん、月明かりの石・・・・依頼内容とハート型の石の件なんですけど、具体的に私達は何をすれば・・・・」

「・・・うーん、そうだねぇ～・・・じゃあ明日、西住ちゃん達と練習試合してよ。戦車貸してあげるから。それで石あげるよ。」

「「「「「「ええええええええっ!!!!!」」」」」」

　望未達４人のみならず後ろにいたあんこうチーム５人からも声が上がる。
「ちょっと待ってくれよ会長さん。私らは今日初めて戦車道を知った素人だぜ。勝てるわけないだろう!!」
　逢衣がすかさず抗議を入れるが
「勝ったらあげるなんて一言も言ってないよ。別に勝敗は関係なしに

引き受けてくれたらあげるよ。」
「じゃあやる。」
「決まりぃ～」
「ちょっと逢衣ちゃん!!」
　毎度物事を勝手に決めてしまう逢衣が今回も決めてしまった。その後もお決まりコースで、望未による説教が始まったが状況は変わることはなく諦めた望未が後ろにいたあんこうチームに「すみません、明日よろしくお願いします。」と深々と頭を下げると「こ、こちらこそ。」と頭を下げ返す面々。そして少し重い空気が流れる。そんな空気を変えたい一心で優花里が望未たちに話しかける。

「あ、あの!!私もご一緒にキャンプしてもよろしいでしょうか？　テントも自前のがありますので!!　野営ならお任せください!!」

　ビシッと敬礼を決める優花里。突然の申し出に「あの、えーと」と答えあぐねていると

「面白そう!!　ねぇ、みんなでテントの中でガールズトークしようよ!!」
「私、テントの中で寝たことがないので楽しみですわ。」
「ふむ、学校なら帰らなくていいから早く寝れそうだな。」
「でしょ？　みぽりんも来るよね？」
「うん!!　とても楽しそう!!」
　かくしてバイク乗り４人とあんこうチーム５人が一緒にキャンプをすることになった。すぐに優花里の指示のもとグランドの隅にてんとを張り、焚き火を起こしてカレー作りが始まり、優花里のサバイバルグッズを見た逢衣が話し掛けてその話で盛り上がったり、学校に行ったことのない千綾が華に学校を案内してもらって喜んだり、沙織が結季奈に頼んで自分の絵を書いてもらい、その絵を見た麻子が腹を抱えて笑い、望未とみほは学園艦と本土の学校の違いについて普通に話したりして楽しく時が過ぎていき、あっという間に就寝の時間とな

り全員すぐに横になると穏やかな寝息をたてた。

「んっ・・・喉、渇いた。」

全員が寝静まって幾時間か過ぎた後、望未は睡眠欲よりも喉の乾きが勝ってしまい目が覚めた。目元を擦りながら全員を起こさないようにのそりと起き上がり、つま先を立てて移動し、テントの外に出る。夏の夜の風に肌寒さを覚えながらも潤いを求めてグランドの水のみ場まで歩を進める。

「んっ、んっ・・・・ぷはーっ。」

水道の蛇口で自分の欲を満たして一息つく。眠気も少しとれ、目も夜に慣れてきた。するとグランド脇にあるベンチに座り、星を眺める人物が目に入った。

「西住さん」

「あっ、森友さん。」

「望未でいいですよ、たぶん同い年ですよね？」

「じゃあ私もみほでいいよ。」

「えっと・・・みほ・・・さん」

「はい、望未・・・さん」

「・・・・フフフフフッ。」

お互い呼び捨てで良いと言ったのに思わず敬称をつけてしまったことに笑う二人。じゃあ無理に変えることはないかと、このままでいきましょうという結論になった。何をしていたんですかと望未が聞くと、星を見てましたと答えるみほ。見上げた黒の天井には幾星霜も散りばめられた小さな光があった。感嘆の声をあげる望未にみほは微笑みながら、ふと浮かんだ疑問を投げ掛けてみる。

「あの、そういえばさっき聞き忘れてたんですけど、どうして望未さんは旅をしているんですか？　生徒会室で『平和請負人代行』とか言ってましたけど・・・」

「ああ、あれですか。えーと、実はですね・・・・」

バツの悪そうな顔をしながら頭を掻き望未は語りだす。

「私、近所に住んでる年上の凄い強いお姉さんがいて、その人が『平和請負人』という揉め事を解決する仕事をやってて、本当のお姉さんみたいに思って慕ってたんですね。向こうも本当の妹みたいに接してくれてたんです。でも昔その人が私をビックリさせようとして川で溺れているフリをして、それを本気にした私が助けようと飛び込んで私の方が本当に溺れちゃって・・・以来私に対して必要以上に過保護になってしまって私を守るために大怪我をしちゃったんです。各地から揉め事処理の依頼が来てるのに・・・私、通知表に「普通です」って書かれるくらい何も取り柄がないんですけど、それが嫌で、何ができるかわからないけどその人のために何かしたくて、だから『平和請負人代行』として依頼があった場所を巡っているんです。他の３人とは成り行きで一緒に旅してるんですけど。」

言い終わってから数秒たって「しまった。話が重すぎた。」と望未は思っていた。しかしみほから発せられた言葉は

「・・・似てる。」

という意外な言葉だった。

「えっ？」

思わず聞き返す望未に「ご、ごめんなさい」と手を振るみほ。首を横に振り、気にしていない意を伝えると「今度はみほさんの話が聞きたい」と言葉を続けた。ゆっくりと深呼吸してみほは自分の過去を語り始める。

「えっと、どこから話そうかな？　私にも自慢のお姉ちゃんがいてね・・・私ね、本当は戦車道、やめたかったの。実は私、戦車道の２

大流派と言われてる家元の娘で、昔から色々と厳しくて・・・前はこことは別の学校に通ってて、そこは戦車道大会９連覇してる名門校だったの。でも１０連覇がかかった決勝戦で、川に落ちた戦車を助けようとして・・・・ううん、私のせいで負けちゃったの。それからお母さんにたくさん怒られて、戦車道のみんなにも合わせる顔がなくて・・・逃げるように戦車道のない大洗女子学園に「普通」の生活を求めて転校して来たの。でも今年から戦車道復活しちゃって・・・って感じで。今のチームも成り行きで出来たようなもので・・・。」

そこで言葉を切るみほに望未はもう一度空を見上げて言う。

「確かに何となく似てますね、私達。飛び出した理由は正反対ですけど。」

「あっ、本当だ。」

「・・・フフフフッ。」

本日２度目のお互いに笑い会う二人。そして

「明日は試合、お願いします。」

「こちらこそ!!」

握手を交わしてテントへ戻るのだった。

翌朝、あんこうチームⅣ号　ＶＳ　戦車を借りた望未達チーム（ルノーＢ１）の練習試合が始まろうとしている。

ちなみに　車長、望未　　砲手、千綾　　装填手、逢衣　　操縦手、結季奈　である。

まあ結果がわかりきっている試合ではあるが唯一の予想外があるとすれば、

「パンツァーフォー!!」
「パ、パンツァー・・・結季奈ちゃん!!　反対方向に向かってる!!
逢衣ちゃん!!ちーちゃんを煽らないで!!　ちーちゃんも落ち着いてからでいいから・・・今撃っちゃダメーーーーー!!!!!!」

学園長の車がまた壊されたことであろうか。

5．ランニングホームラン

望未達が大洗学園艦に来て数日、いよいよ定期連絡船が来る日の朝になった。ここ数日間に望未達は他の戦車道履修者達に紹介され、ある時はバレー部に誘われ、またある時は好きな歴史上の人物について聞かれ、さらには乗ってきたバイクが魔改造されかけることもある濃厚な時間を送っていた。

テントをたたみ、荷物をバイクに収納して連絡船までの時間をグランドでぼーっと過ごす望未。なんとなく見つめてる視線の先にはバレー部と一緒にスパイク練習をしている逢衣の姿がある。もともとアクティブな逢衣はすぐにバレー部の面々と仲良くなった。ちなみに荷物の片付けを手伝わなかったことに関してはもう何も言わないことにした。バレー部員（廃部済）の佐々木あけびがトスをあげ、力任せに腕を振り、ボールに当てる。しかし球は遥か彼方の方向へ。

「いや～、野球だったらランニングホームランだったかな～!!」

わけのわからないこと言ってる、と思いながらため息をついてるとトコトコと千綾が近づいてきた。

「どうしたの？　ちーちゃん。」

「写真、撮りたい、みんなで。・・・今日でお別れだから。」

「あっ、いいね！　撮ろう撮ろう!!　結季奈ちゃ～ん、逢衣ちゃ～ん、みなさ～ん！」

その場にいた全員に写真撮影の件を伝えるとバレー部員達が「じゃあ私達が全員を呼んできます!!行くぞ、お前達！根性～!!」と別れて戦車道履修者を呼びに行ってくれた。その間に千綾のデジカメをセットしていると

「おはよう、望未さん。」

「あっ、おはよう、みほさん。みなさんも。」

「おはようございます！いい朝でありますな!!」

「おはようございます、望未さん。」

「おはよう、のぞみん!!　聞いたよ、写真撮るんだって？」

「・・・・おは・・・・よう。」
「冷泉さんは死んでますね。」
「麻子は朝弱いから・・・それよりも写真!!　全員集まるまで時間がかかるからまずは４人だけで撮ってみたら？　撮ってあげるよ。」

沙織の提案に頷き、デジカメを手渡す千綾。戦車倉庫の前に並ぶ４人のバックにはⅣ号戦車、その前に望未、逢衣、結季奈、千綾が液晶画面に映る。
「はい、撮るよ～。3、2、1。」
ピピッという電子音が聞こえ、思い出が1枚追加された。
「今度はあんこうチームのみなさんで撮ったらどうですか？　ちーちゃん、いいよね？」
「うん。」

デジカメの持ち主の千綾に許可を取り、今度は自分が撮る側にまわろうと沙織からカメラを受け取ろうとするが、
「あっ、大丈夫大丈夫。全員で撮るときの練習としてタイマーで撮るから・・・セットしてと・・・」

慣れた手つきでテキパキとカメラをセットしてチームメイトに「並んで並んで！」と指示する。そしてレンズを見つめ
「多分これでＯＫだよね？　よしっ!!　撮る・・・きゃ!!」
タイマーを押して一列に並んでいるメンバーの元へかけていく沙織。だが途中で盛大に転んでしまう。一同驚くがすぐに立ち上がり「へーキへーキ」と言いながら頭に手をやり、もう片方の手でヒラヒラと空気を扇ぎ
「あっ‼タイマー切れるよ！みんなカメラ見て!!」

数秒後に先程と変わらない電子音が鳴り、カメラの容量が少し減る。液晶画面を見て、みほ達の微笑みが無事に収められているのを確

認するとなんとなく嬉しくなる望未達４人。
「なあ、今度は９人で撮ろうぜ。」
「逢衣ちゃん、たまには良いこと言うんだね。」
「どういう意味だよ、望未。」
「お、落ち着いてください２人とも。」
「いつものノンスケとウータンとゆきっぺのやり取りだ。」

千綾のツッコミにクスクスと笑いながら「そうみたいだね。」と返すみほ。それにつられるように笑い出すあんこうチーム。揉めていた３人もこの様子にお互いに見つめ合って笑い合うしかなかった。写真を撮るには最高の雰囲気のなか、すかさず千綾はタイマーを押し「みんな!!」と声をかけると全員そのままの笑顔で時を切り取る電子音が聞こえた。
「あっ、先輩達だけ先に撮ってる！」
「ずるーい!!」

他の戦車履修者達も続々と集まり、デジカメはこの後大忙しだった。そして目的だった戦車道履修者全員とバイク乗り４人の集合写真は撮ることが出来た頃には出発にちょうどいい時間だった。
校門前にバイクを並べ、「ありがとうございました！」と数日間お世話になった大洗女子学園とみほ達に一礼する望未達４人。

「ちゃんと手続きはしといたから安心して。」
「ありがとうございます、生徒会長さん。」
「望未さん、気をつけてね。」
「ありがとう、みほさん。会えて、話が出来てよかった。準決勝頑張ってね。」
バイク運転用のグローブを外して右手を差し出す望未。それを両手で包み込むように握るみほ。過ごした期間はわずか数日だが、それでも、確かな友情の種は植えられた。
「でも・・・正直言うとやっぱり不安かな。この先の旅で何があるかわ

からないし、何が出来るかもわからないし。」
自分の心の声を正直漏らす望未。ネガティブな行動にみえるかもしれないが言いかえればそれだけみほのことを信頼しているのだ。
「大丈夫だよ。」
その信頼に応えるようにみほは言う。
「だって・・・1人じゃないから。私もみんなに出会えたから戦車道を続けられたの。」
後ろを振り返るみほ。あんこうチームの面々は照れ笑いを浮かべる。
「だから大丈夫。響さんと小坂さんと御園さんが一緒なら。」
強く望未の目を見つめて手を握るみほ。
「うん。」
短く、だけど力強く言葉を返し、手を離す。ヘルメットを被り、バイクに跨がってキックしエンジンをかける。その音が別れの合図。さよならは言わず、無言のまま手を振り、走りだす。どんどん小さくなっていく望未達の背中をみほ達は見えなくなるまで振り続けた。
大洗学園艦で過ごした望未達の数日の夏が今、終わった。

・・・・・・
・・・・・
・・・・
・・
・

Bonus Track

西住みほ様

お久しぶりです。お元気ですか？私は元気です。そして戦車道全国大会優勝おめでとうございます。まさか廃校がかかっていたなんて知らなくて後からニュースで知りました。だから余計に優勝して本当に嬉しく思ってます。私達の方はあの後、各地を転々として依頼をどうにか・・・こなせた、かな？　色々あったんだけど今度会えた時に直接言います。・・・そして私から大事なお知らせがあります。ちーちゃん・・・千綾ちゃんのことなんだけど、諸事情で急に自分の生まれ故郷に帰らなくちゃ行けなくなったの。千綾ちゃんは実は日本の生まれじゃなくて、もう多分会えないかもしれないの。でも千綾ちゃんが残してくれた写真がいっぱいあるの。大洗で撮った写真もあるので同封しときます。千綾ちゃんの件の詳細も直接会って話せたらと思っています。それではお体に気をつけて。

森友望未より

森友望未様

お久しぶりです。お手紙と写真ありがとうございます。とても嬉しいです。あんこうチームのメンバーも喜んでいました。そして・・・千綾ちゃんの件ですが残念でなりません。皆さんと過ごしたのは数日だけでしたがそれでも私、そして私達、大洗女子学園のメンバーにとっては宝物のような思い出だからです。是非、お会いした時にお話を聞かせてください。ちなみに大洗ではあんこう祭りという有名なお祭りが11月にやりますので皆さんで来てください。お待ちしています。

西住みほより

自室で手紙を読み終えた望未は送られてきた封筒に丁寧にしまい、

「思い出コーナー」と書かれたコルクボードに立て掛け自室を後にする。コルクボードには望未達が各地を回ったときの写真が貼ってあり、その中の1枚に望未達4人とあんこうチーム5人の笑顔の写真があった。望未達が大洗女子学園で過ごした一夏の思い出の確かな証拠がそこにはあった。

その後、再び廃校の危機になったことを聞きつけ、大洗から北海道へ向かうフェリー、さんふらわあに乗り込むバイクが2台あったのは別のお話。

Ｓｅｃｒｅｔ　ｔｒａｃｋ

「おーーい!!!みほさーん!!」

「あっ!!望未さん!!　ようこそ大洗へ。そして、ようこそあんこう祭りへ!!!」